

基本計画書

基本計画										
事項	記入欄							備考		
計画の区分	学部の設置									
フリガナ設置者	ガッコウホウジン ショウケイガクエン 学校法人 尚綱学園									
フリガナ大学の名称	ショウケイダイガク 尚綱大学(Shokei University)									
大学本部の位置	熊本県熊本市中央区九品寺2丁目6番78号									
大学の目的	尚綱大学は、教育基本法及び学校教育法に基づき、深く学術を研究教授し、広く社会と文化の発展に寄与するとともに、建学の精神に則り、先進的知識と高度な技能とを修得して、智と徳を兼備し、生涯にわたって研鑽を重ね、人間性を尊重し社会に貢献する女性を育成することを目的とする。									
新設学部等の目的	こども教育学部は、子どもの内面を理解し適切な指導を行う力、家庭や地域社会と協働し、連携を図りながら教育を実践する力、特別な教育的配慮を要する子どもに対応する力を身につけ、子どもに信頼され慕われる人間性豊かな幼児教育・保育者を養成することを目的とする。									
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地		
	こども教育学部 (Faculty of Childhood Education) こども教育学科 (Department of Childhood Education) 計	年 4	人 70	年次 人 3年次 5	人 290	学士 (教育学) (Bachelor of Education)	年 月 第 年次 令和5年4月 第1年次 令和7年4月 第3年次	熊本県菊池郡菊陽町武蔵ヶ丘北2-8-1		
同一設置者内における変更状況 (定員の移行, 名称の変更等)		短期大学部幼児教育学科[定員減] (△50) (令和4年4月届出予定) 令和5年4月名称変更予定 尚綱大学短期大学部附属こども園→尚綱大学附属こども園								
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数				
	こども教育学部 こども教育学科	講義	演習	実験・実習	計	124単位				
教員組織の概要	学部等の名称			専任教員等					兼任教員等	
	新設分	こども教育学部	人	人	人	人	人	人	人	
	計	6 (5)	7 (5)	1 (1)	0 (0)	14 (11)	0 (0)	32 (25)		
既設分	現代文化学部	10 (10)	6 (6)	2 (2)	1 (1)	19 (19)	0 (0)	36 (36)		
	生活科学部	7 (7)	5 (5)	3 (3)	1 (1)	16 (16)	8 (8)	37 (37)		
	計	17 (17)	11 (11)	5 (5)	2 (2)	35 (35)	8 (8)	—		
合計		23 (22)	18 (16)	6 (6)	2 (2)	49 (46)	8 (8)	—		

教員以外の職員の概要	職 種		専 任	兼 任	計				
	事 務 職 員		40人 (28)	6人 (4)	46人 (32)				
	技 術 職 員		0 (0)	0 (0)	0 (0)				
	図 書 館 専 門 職 員		4 (4)	0 (0)	4 (4)				
	そ の 他 の 職 員		2 (2)	0 (0)	2 (2)				
	計		46 (34)	6 (4)	52 (38)				
校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の学校等の専用	計				
	校 舎 敷 地	38,943㎡	5,700㎡	53,080㎡	97,723㎡	尚綱大学短期大学部 620人 6,200㎡			
	運 動 場 用 地	0㎡	3,250㎡	12,549㎡	15,799㎡	尚綱高校 960人 8,400㎡			
	小 計	38,943㎡	8,950㎡	65,629㎡	113,522㎡	尚綱中学 240人 3,600㎡			
	そ の 他	0㎡	492㎡	20,623㎡	21,115㎡	附属こども園 290人 1,316㎡			
	合 計	38,943㎡	9,442㎡	86,252㎡	134,637㎡				
校 舎		専 用	共 用	共用する他の学校等の専用	計				
		7,863㎡ (7,863㎡)	28,607㎡ (28,607㎡)	11,939㎡ (11,939㎡)	48,409㎡ (48,409㎡)	尚綱大学短期大学部 620人 6,100㎡ 尚綱高校 960人 5,280㎡ 尚綱中学 240人 744㎡ 附属こども園 290人 2,080㎡			
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	大学全体			
	39室	89室	23室	5室 (補助職員 2人)	0室 (補助職員 0人)				
専任教員研究室		新設学部等の名称		室 数					
		こども教育学部		14 室					
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	学部単位での特定不能なため、大学全体の数	
		こども教育学部	259,320 [17,034] (247,320 [16,434])	2,454 [71] (2,442 [69])	4 [1] (4 [1])	6,477 (6,077)	3 (3)		0 (0)
	計	259,320 [17,034] (247,320 [16,434])	2,454 [71] (2,442 [69])	4 [1] (4 [1])	6,477 (6,077)	3 (3)	0 (0)		
図書館		面積	閲覧座席数		収 納 可 能 冊 数				
		2,075㎡	182		278,000冊				
体育館		面積	体育館以外のスポーツ施設の概要						
		2,472㎡	トラック1面						
経 費 の 見 積 り 及 び 維 持 方 法 の 概 要	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	(単位:千円)
		教員1人当り研究費等		100	100	100	100	—	
	共同研究費等		0	0	0	0	—	—	
	図書購入費	5,000	2,500	2,500	0	0	—	—	
	設備購入費	105,100	2,000	0	0	0	—	—	
	学生1人当り納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次		
	1,110千円	890千円	890千円	890千円	—千円	—千円			
学生納付金以外の維持方法の概要			私立大学等経常費補助金、手数料収入、雑収入等						
既 設 大 学 等 の 状 況	大 学 の 名 称 尚綱大学								
	学 部 等 の 名 称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地
	現代文化学部	年	人	年次人	人		倍		
	文化コミュニケーション学科	4	75	—	300	学士(文学)	0.59	平成30年度	熊本県熊本市中央区九品寺2-6-78
生活科学部									
栄養科学科	4	70	10	300	学士(栄養学)	1.12	平成18年度	熊本県熊本市中央区九品寺2-6-78	

既設大学等の状況	大学の名称	尚綱大学短期大学部								
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学員 年次人	収容定員	学位又は 称号	定員 超過率	開設 年度	所在地	
	総合生活学科	2	80	-	160	短期大学士 (生活学)	0.70	昭和27年度	熊本県熊本市中 央区九品寺2-6- 78	* 幼児教育学科 令和5年度より 入学定員を150 人から100人へ 50人の減員 収容定員を300 人から200人へ 100人の減員
	食物栄養学科	2	80	-	160	短期大学士 (食物栄養学)	0.96	昭和42年度	熊本県熊本市中 央区九品寺2-6- 78	
	幼児教育学科	2	150	-	300	短期大学士 (幼児教育学)	1.05	昭和43年度	熊本県菊池郡菊 陽町武蔵ヶ丘北 2-8-1	
附属施設の概要		尚綱大学短期大学部附属こども園 目的：幼保連携型認定こども園の運営 所在地：熊本県菊池郡菊陽町武蔵ヶ丘北2-8-1 設置年月：平成28年4月 規模：規模：土地 23,917.11 m ² 、建物 2,681.70 m ²								

別記様式第2号（その2の1）

教 育 課 程 等 の 概 要																
(こども教育学部こども教育学科)																
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実習	教 授	准 教授	講 師	助 教	助 手			
全学 共通 科目	熊本学	1前		1		○			1	1					兼3	オムニバス
	日本伝統文化入門	1後		1			○								兼1	
	小計（2科目）	—	0	2	0	—	—	—	1	1	0	0	0	兼4	—	
教養 基礎	基礎セミナー	1前	1				○		1	1	1				兼1	共同
	キャリアデザイン	1後	1				○		1	1	1					共同
	キャリアトレーニング	4前	1				○		1	1	1					共同
	心理学	1前		2		○			1							
	音楽	2前		2		○									兼1	
	生命倫理	1後		2		○									兼1	
	日本国憲法	1前	2			○									兼1	
	異文化理解	1後		2		○									兼1	
	女性と社会	1前		2		○									兼1	
	子どもと環境	2前		1			○		1							
	人権教育	1後		2		○									兼1	
	保健体育	1前	1			○									兼1	
	体育実技Ⅰ	1前	1					○							兼1	
	体育実技Ⅱ	2前		1				○		1						
	食の健康科学	1前		2		○									兼1	
	日本語表現Ⅰ	1後	1				○								兼1	
	日本語表現Ⅱ	2前		2		○									兼1	
	小計（17科目）	—	8	18	0	—	—	—	3	1	1	0	0	兼8	—	
多 文 化 コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン ／ 外 国 語	英語ⅠA	1前		1			○								兼1	
	英語ⅠB	1前		1			○								兼1	
	英語ⅡA	1後		1			○								兼1	
	英語ⅡB	1後		1			○								兼1	
	中国語Ⅰ	1前		1			○								兼1	
	韓国語Ⅰ	1前		1			○								兼1	
	中国語Ⅱ	1後		1			○								兼1	
	韓国語Ⅱ	1後		1			○								兼1	
	海外語学研修（英語）	3後		1			○								兼1	
	海外語学研修（中国語）	3後		1			○								兼1	
	海外語学研修（韓国語）	3後		1			○								兼1	
	小計（11科目）	—	0	11	0	—	—	—	0	0	0	0	0	兼6	—	
情 報 ・ I C T	情報処理Ⅰ	1前	1				○			1						
	情報処理Ⅱ	1後	1				○			1						
	プレゼンテーション演習	2後		1			○			1						
	小計（3科目）	—	2	1	0	—	—	—	0	1	0	0	0	0	—	

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専門教育科目	教育原理	1前	2			○			1						兼1	
	保育者論	2後	2			○			1							
	教育心理学	2前	2			○			1							
	保育原理	1前	2			○										
	保育・教育課程論	2前	2			○			1							
	保育ICT演習	3後		1			○			1						
	基礎演習Ⅱ	1後	1				○		1	1	1			共同		
	保育・幼児教育研究法Ⅰ	2前	1				○			1						
	保育・幼児教育研究法Ⅱ	2後	1				○			1						
	保育・幼児教育研究Ⅰ	3前	1				○		4	3	1			共同		
	保育・幼児教育研究Ⅱ	3後	1				○		4	3	1			共同		
	保育・幼児教育研究Ⅲ	4前	1				○		4	3	1			共同		
	保育・幼児教育研究Ⅳ	4後	1				○		4	3	1			共同		
	卒業研究・卒業論文	4後	1				○		4	3	1			共同		
	小計(14科目)	—	18	1	0	—	—	—	6	5	1	0	0	兼1	—	
	専門教育科目	保育内容総論	1前	1				○			1					兼1
		保育内容-健康	1前	1				○		1						
		保育内容-人間関係	2後	1				○		1						
		保育内容-環境	1後	1				○		1						
		保育内容-言葉	1前	1				○			1					
保育内容-音楽表現		2前	1				○			1						
保育内容-造形表現		2前	1				○			1						
健康の指導法		1後	2			○			1							
人間関係の指導法		3前	2			○			1							
環境の指導法		2前	2			○			1							
言葉の指導法		1後	2			○				1						
表現(音楽)の指導法		2後	1				○			1						
表現(造形)の指導法		2後	1				○			1						
複合領域の指導法Ⅰ		3後		2		○			1	2				オムニバス		
複合領域の指導法Ⅱ		4前		2		○			1	2				オムニバス		
教育方法論Ⅰ		2後	2			○			1							
教育方法論Ⅱ		3前		1			○			1						
幼児理解		2後		1			○		1							
教育相談		3前	2			○			1							
音楽基礎		1前	1				○							兼1		
器楽Ⅰ	1後		1			○			1				兼9 共同			
器楽Ⅱ	2前		1			○			1				兼9 共同			
器楽Ⅲ	2後		1			○			1				兼9 共同			
器楽Ⅳ	3前		1			○			1				兼9 共同			
食育論	3後		2		○								兼1			
子どもの保健	1後		2		○			1								
子どもの食と栄養	3前		2			○							兼1			

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考					
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手						
専門教育科目	身体表現	2後		1			○		1										
	乳児保育Ⅰ	2前		2		○			1										
	乳児保育Ⅱ	2後		1			○		1										
	子どもの健康と安全	2後		1			○		1										
	基礎演習Ⅰ	1前	1				○		1	1	1							共同	
	教育実習Ⅰ	2後		1					1	2									共同
	教育実習Ⅱ	4前		3					1	1									共同
	教育実習指導Ⅰ	2通		1			○		1	2									共同
	教育実習指導Ⅱ	4前		1			○		1	1									共同
	保育実習ⅠA	2後		2				○	1	3									共同
	保育実習ⅠB	3前		2				○		2	1								共同
	保育実習指導ⅠA	2後		1			○		1	3									共同
	保育実習指導ⅠB	3前		1			○			3									共同
	保育実習Ⅱ	3後		2				○	1	2									共同
	保育実習Ⅲ	3後		2				○		3									共同
	保育実習指導Ⅱ	3後		1			○		1	2									共同
	保育実習指導Ⅲ	3後		1			○			3									共同
	保育・教職実践演習	4後	2				○		1	1									共同
	小計(45科目)	—	—	25	39	0	—	—	4	7	1	0	0	兼1	—				
子育て支援	子ども家庭福祉	1後		2		○				1									
	子ども家庭支援の心理学	1後		2		○			1										
	子ども家庭支援論	3前		2		○				1									
	子育て支援	3後		1			○			1									
小計(4科目)	—	0	7	0	—	—	—	1	1	0	0	0	0	0	—				
教育・保育の連携・協働	教育社会学	3前	2			○													兼1
	社会福祉	1前	2			○				1									
	社会的養護Ⅰ	2前		2		○				1									
	社会的養護Ⅱ	3前		1			○			1									
	保育マネジメント論	4前		2		○			1										
	保育における連携・接続	3後		2		○			1										
	保育ソーシャルワーク実践演習	4前		1			○			1									
小計(7科目)	—	4	8	0	—	—	—	2	1	0	0	0	兼1	—					
専門教育科目	特別支援教育概論(障害児保育を含む)	1前	2				○		1	1									共同
	療育論	3前	2			○				2									共同
	療育論演習	3後		1			○			2									共同
	障害児教育総論	1前	2			○			1										
	知的障害児の心理・生理・病理	1後	2			○													兼2
	肢体不自由児の心理・生理・病理	2前		2		○													兼2
	病弱児の心理・生理・病理	1後		2		○					1								
	知的障害児教育論	2前	2			○			1	1									オムニバス
	肢体不自由児教育論	2後		2		○			1										
病弱児教育論	2前		2		○					1									

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
専門教育科目	特別支援教育コーディネーター論	3後		2		○			1						共同 共同
	知的障害児の言語指導	2後		2		○			1						
	障害児教育課程論	3前		2		○			1						
	重複/発達障害児教育総論	3前		2		○			1						
	視覚障害児教育総論	3後		2		○			1						
	聴覚障害児教育総論	3後		2		○			1						
	特別支援学校教育実習	4後		2				○	2	1					
	特別支援学校教育実習指導	4通		1				○	2	1					
	小計 (18科目)	—		10	24	0	—		2	2	1	0	0	兼3	
	合計 (121科目)		—	67	111	0	—		6	7	1	0	0	兼32	—
学位又は称号		学士 (教育学)	学位又は学科の分野				教育学・保育学関係								
卒業要件及び履修方法							授業期間等								
・必修科目をすべて修得し、教養教育科目20単位、専門教育科目104単位以上を修得すること。							1 学年の学期区分			2期					
							1 学期の授業期間			15週					
							1 時限の授業時間			90分					

別記様式第2号（その3の1）

授 業 科 目 の 概 要			
(こども教育学部こども教育学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養 教育 科目 全学 共 通 科 目	熊本学	尚綱大学の地元である「熊本」の文化について、豊かな自然環境やそれを基にした生活や風土などを、文学や芸術など多様な観点から考察する。熊本県と連携協定を締結し「くまモン学」という新たな学問の分野と方法の構築を図っている本学の強みを生かした授業として、「くまモン」が生み出す観光や物産振興また雇用機会の拡大などの今日的话题や、そこに生まれた新たな文化を学ぶ授業、また、保育者の養成において熊本（地域社会）との連携を深めていくための方策など、幅広い分野を対象とした総合的な考察を行う。 (オムニバス方式/全8回) (1 山縣ゆり子/1回) 熊本と尚綱」熊本の近現代の歴史の変遷と尚綱学園の歩みを学ぶことにより地域の歴史・文化の概要を理解把握する。 (2 浜崎隆司/1回) 「熊本の幼児教育」幼児教育・保育の現状と保育者としての可能性や夢を 考える。 (10 森みゆき/2回) 熊本に残る文化遺産から、関連する近世以前の音楽について学び、熊本に残る文化遺産から、関連する近代以降の音楽について学ぶ。 (20 武田昌憲/2回) 熊本の文化を歴史・地域・芸術など多様な観点から熊本への理解を深める。中世の古典に書かれた熊本の様子などから当時の風土・文化・生活などを学ぶ。 (21 柳田紀代子/2回) 「熊本の地方創生」各地域の自然、食、歴史を踏まえて、様々なチャレンジを行っている地方創生の事例を学ぶ。「熊本のイメージ戦略」くまモンブランドが生み出す熊本の観光・物産振興・雇用機会の拡大などの可能性を考える。	オムニバス方式
	日本伝統文化入門	茶の湯は、ながい歴史の中で継承されてきました。「日常茶飯事」と申すように茶は昔から常に暮らしの中に息づいてきました。「お茶を飲む」という行為に宿るところが手前や作法として洗練されてきたもの、それが「茶道」です。皆さんのご先祖が大切に伝えてきた茶道は、日本が誇るべき伝統文化です。茶の湯は、亭主（客を招く人）がこころをこめて客をもてなす文化です。「一期一会」という言葉は、たとえ亭主が同じ客を何度茶会に招くことがあっても、その一会は二度とないことに思いをいたし、こころを尽くして客をもてなすことを意味します。亭主は客に対して細やかにこころを配り、客もそうした亭主のもてなしに深く感じ入り、それにこたえるようにふるまいます。そして亭主と客はこころの結びつきをつよくします。茶の湯は、「人」と「人」、人の「こころ」と「こころ」をつなぐ架け橋の文化なのです。しかし、それは茶の湯の時に限ったことではありません。ふだんの生活のなかで、常に人を思いやり、気遣うところは、とても大切です。そうしたこころを、茶道を通じて再発見し、育むことができると思います。そうした意味でも、近年、幼稚園や小学校でも茶道をとり入れるところがふえています。小さい子どもたちが、楽しそうにお茶を点てたり、お茶をいただいたりする光景を思うと、とても微笑ましい気持ちになります。これからもずっとお茶に親しんでいってほしいと願う次第です。	

教養基礎	基礎セミナー	<p>基礎セミナーでは、これからの大学生生活を有意義なものにするために必要な基本的姿勢や知識を身につける。まず、建学の精神・教育理念及び4年間の学修の理解を図る。また、知りたいことを進んで学ぶための学修の進め方やプレゼンテーション、レポートの作成等について学ぶ。さらに、自己理解をもとに大学生活に必要な協働などの社会的スキルを身につける。これらについて全体での演習と、10名程度でのグループワークやディスカッションを適時組み合わせることで学修を進めることにする。</p> <p>なお、本科目はインターンシップやボランティアサークル等で学生指導経験が豊かな教員（鄭）、及び心理面からの支援経験（公認心理師）が豊かな教員（溝上）、教育現場指導経験のある実習担当教員（尾関）が担当する。</p>	共同
	キャリアデザイン	<p>一人一人の社会的・職業的自立の基盤となるキャリア発達を促す「キャリア教育」への理解を深め、働くことを通じて人や社会に関わる「自分らしい生き方」として職業観・勤労観を具体的にしていく。そのために、様々な幼児教育・保育の職について情報収集して働く意義や目的を探求するとともに、将来の夢や3年後（大学生生活の終了時）の自分を想定して、そこまでに養う力、1年後の自分、はじめの一歩などを考えていくことにする。</p> <p>自主実習、ボランティアの経験もキャリア発達を促すために貴重な経験であることから、後半にはその意義と具体的に進める手立てを学ぶことにする。</p> <p>なお、本科目はインターンシップやボランティアサークル等で学生指導経験が豊かな教員（鄭）、及び心理面からの指導経験（公認心理師）が豊かな教員（溝上）、実習担当教員（尾関）が担当する。</p>	共同
	キャリアトレーニング	<p>幼児教育・保育等の職場での実習経験から、これまで養ってきた各自の職業観・勤労観をさらに深め、必要となる情報を収集して自身の進路選択に結びつける。また、ライフイベントやワーク・ライフ・バランス等も踏まえてよりよい働き方や将来設計について考える。あわせて「チームで働く力」を高めるために必要な発信力、傾聴力、ストレスコントロールなどについて学ぶ。これらのことについて、OG講話や保育所・幼稚園等との就職懇談会を通して具体的な理解を深める。</p> <p>なお、本科目はインターンシップやボランティアサークル等で学生指導経験が豊かな教員（鄭）、及び心理面からの支援経験（公認心理師）が豊かな教員（溝上）、現場指導経験のある実習担当教員（尾関）が担当する。</p>	共同
	心理学	<p>この授業では古典から最新の研究までを取り上げ、心理学の基本的な考え方を概説する。心理学は、人間や動物を対象に科学的方法を通じて得られた客観的なデータに対し、統計的処理や質的研究を行い、理論やモデルを検証して、心に関わる領域を体系的に理解しようとする学問であることを理解するのが第一の目標である。さらに、心理学の理論や知識を自分の言葉で説明できるようになること、心理学の知見が日常生活における諸問題にどのような関わりを持つか考えることができるようになること、そして人間とは何かを理解することを目指し、保育者として社会人として備えるべき他者への尊敬と高い人間性の修得につなげる。</p>	

音楽	<p>西洋を中心とした音楽史の中で、幼児の音楽表現と関連性を見出すことのできる音楽に着目し、視聴覚教材を援用しながらその特質について理解を深める。つまり、社会の中で普段耳にすることの多い様式を音楽史上で確認するとともに、耳慣れない種類の音楽も先入観なしに受容する態度を身につける。これによって、既成の音楽の幼児による個性的な捉え方から、幼児自身によって発せられる独自の表現まで、幼児の音楽表現に内在する幅広い特質を理解するための素地を養う。</p>	
生命倫理	<p>現代社会において生・老・病・死など生命に関わる様々な事柄は、複雑で人々が直面するジレンマや問題は簡単には解決できない。生命倫理学は、これら生命倫理の諸問題の内容を深く理解し、多視点から検討・考察し、私たちはどのように生きるべきか、人間の生命はどうあるべきか、について考える学問である。本講義では、生命の誕生や医療における生命倫理に加え、食生活や障害、研究に関する生命倫理など幅広い事例を取り上げ、生命に対する人間の責任ある関わり方について自分の考えを深め、論理的に表現できることを目指す。</p>	
日本国憲法	<p>保育者・教育者として日本国憲法を学ぶことの意義を踏まえた上で、憲法を頂点とするわが国の基本的な法構造と司法制度について理解し、統治機構と人権規定を中心に、日本国憲法の構造全体について学修する。統治機構の学修においては、①選挙や裁判員制度など「主権者」としての立場から「民主主義」について学ぶこと②国家権力である国会・内閣・裁判所の権力構造を理解し国民との関係性を学ぶこと③近代立憲主義について理解することを目標とする。人権規定の学修においては、①日本における人権規定の歴史を理解すること②「子どもの権利条約」など国際条約との関連性も視野に入れ、社会問題も視野に入れて考察することができる力をつけることを目標とする。</p>	
異文化理解	<p>異文化への理解および異文化間でのコミュニケーションを円滑に行うための態度やスキルについて学び、理解することを目的とする。具体的には、ロールプレイやミニゲームを通して、異文化接触を疑似体験し、異文化接触の場面について検証・考察を行う。これらの活動を通して、異文化についての知見を深めるとともに、自文化を発信するための内容や方策についても考える。また、異なる文化背景の人々を受け入れることができる素地を養う。</p>	
女性と社会	<p>「女性」をとりまくさまざまな社会の現状と課題を学ぶ。2016年に施行された「女性活躍推進法」に象徴されるように、少子高齢社会となったわが国において、女性の労働力としての必要性が圧倒的に高まったこともあいまって、高度経済成長期以来の「男性＝仕事」「女性＝家庭」という「固定的性別役割分業」意識や従来「男らしさ」「女らしさ」のステレオタイプの規範にとらわれた社会からの脱皮ははじめている。しかし、実際には男女平等の指標を測るジェンダーギャップ指数のランキングでは156か国中120位（2021年3月）と男女平等の実現にはほど遠い状況にある。</p> <p>本講義では、現代日本におけるこのような現状と課題を学ぶことで、「性別」にとらわれることなく、すべての人が生き難さを感じずに自己実現できる社会とは何かについて考察する能力を育成することを目標としている。</p>	

子どもと環境	<p>本授業では、子どもと環境について活動や環境構成とその意図について学ぶことを目的とする。幼稚園教育要領などにおいては、領域「環境」について記載している箇所を理解するのみならず、環境の実践事例などをもとにしながら、子どもたちが活動するに伴い構成する環境やその活用方法について学ぶことになる。その際、「環境」との関わりを通して子どもが身につけること、または身につけることができる資質・能力についても習得するとともに、保育者としての援助方法についても学ぶ。また、実際の保育・幼児教育現場についても訪問することを行い、授業での学びが実際の保育現場においてどのように展開（環境構成）されているのか、そしてその環境を通して子どもたちの学びがどのように展開されているのか学ぶ。</p>	
人権教育	<p>「人権」を侵害される行為は、いまや日常にあふれているといっても過言ではない。学校でのいじめや体罰、家族による暴力・虐待、職場でのハラスメントなど、人々の命や生活の基盤となる場で耐え難い差別や暴力が繰り返されている。また、性別に対する自己認識やセクシャリティの多様性に対する認識も少しずつ深まってきたが、いまだ生きづらさを抱える人は多い。とくに子どもをめぐると人権侵害は重大であり、児童虐待の件数は年々増えるばかりである。世界に目を向ければ児童労働に苦しむ子やテロ・戦争、貧困によって生存権が脅かされている子どもたちもいる。</p> <p>このような状況を踏まえ、本授業では、日本の内外の現状を可能な限り正確に知り、人権思想の歴史や意義を学修することで、さまざまな問題を多角的に捉える視点を育成することを目標とする。</p>	
保健体育	<p>めまぐるしく変化している現代社会を生きていく場合、健康や安全についての理解や実践力を身につけ将来社会及び家庭の有益なる形成者として成長していく為に、今現在学生として女性として、さらには保育に携わる者として知っておかねばならないこと、考えておかねばならないことがあるはずである。この事について講義を通して理解を深める。</p>	
体育実技 I	<p>幼児教育に携わっていくという視点に立った場合、幼児の身体運動は遊びを通じて現れ、如何に楽しく遊ぶことができるかでその身体運動表現、しいては「精神解放」の現れ方は大きく違ってくる。体育実技ではゲーム（遊び）を通して、まずは自らが楽しく活動し精神を解放する経験から「心身の変化（体力・運動能力の向上）」を実感し、幼児の運動遊びを指導・実践していく手がかりを掴むきっかけとする。</p> <p>また、本時の活動を通じクラスのメンバーとのコミュニケーションを深めること、4年間の学生生活を円滑にする営みにつなげる。</p>	

	体育実技Ⅱ	本講義は、幼児期の発育発達段階に応じた多様な運動遊び・ダンス・スポーツの実践を通して、生涯にわたって運動・スポーツを親しむ基礎的知識と技能を習得、実践方法について学ぶ。また、将来幼児教育者として幼児期に必要な運動あそびに関する知識、技能、さらに子どもの援助や指導方法について理解を深め、指導ができる力を養うことを目的とする。到達目標としては、1. 運動・スポーツの価値や多様性について理解し、様々な運動動を通して運動に親しむ基礎的スキルを習得する。2. 運動・ダンス・スポーツを通して体力の向上や協調性・社会性を身に付ける。3. 幼児期に必要なとされる運動遊びに関する基本的な知識と技能を習得する。4. 将来幼児教育者として必要な幼児の運動あそびに関する知識、技能を身に付け、子どもの指導や援助ができる指導力を習得する。	
	食の健康科学	乳幼児期は、一生のうちで最も心身の成長・発達が盛んな時期である。この時期の食生活の課題を理解し、望ましい食生活の在り方や栄養に関する基本的な知識を学ぶ。さらに、特別な配慮を要する乳幼児の特性やその支援方法を学ぶ。	
	日本語表現Ⅰ	大学生活に必要な日本語表現技術を学び、その運用能力を身につけることを目的とする。特に、アカデミックワードを活用し、レポートや論文など文章表現を使う形態にふさわしい文体が書けるようになること、事実を正確にわかりやすく説明し、論理的に自分の意見を述べられるようになることを目指す。授業では、レポートや論文の構成や特徴、使用する文章表現を学び、どのように活用するかを学修する。	
	日本語表現Ⅱ	「日本語表現Ⅰ」で学んだ、大学生活に必要な日本語表現技術の理解を深め、その運用能力を向上させることを目的とする。特に、文章作成のための適切な情報を収集し、分析できるようになること、論理的でわかりやすい文章作成や発表を行えるようになることを目指す。授業では、レポートや論文に必要な情報収集の仕方、その分析の仕方を学修し、学んだことを活かして、論理的に書けるように指導する。	
多文化コミュニケーション/外国語	英語ⅠA	保育の現場でも様々な地域、文化を背景とした子どもたち・保護者の姿を目にすることが多くなった。保育者を目指す学生が保育現場で子どもや保護者、また同僚との英語でのコミュニケーションができるようになることを目標とし、保育現場でよく使用される英語表現や簡単な子どもに関する表現を学んでいく。	
	英語ⅠB	様々な地域・文化を背景とした子どもたち・保護者に対して少しでも彼らの不安を減らすことができ、安心して保育を任せてもらえるよう、また一人一人の子どもを共に育てていけるように英語でのコミュニケーションが取れることを目標にする。そのために様々な英語表現を学ぶこと、また基礎的英語力も身につけていきたいと考えている。	
	英語ⅡA	子どもたちの創造力・表現力を引き出すために、英語で書かれた絵本を中心に学んでいく。文字や挿絵をヒントに時代や地域を知ることや使われている英語や表現を知ることによって日常の暮らしを学ぶことができる。読み聞かせなどを通して子どもたちに絵本の世界を知ってもらい、興味を持ってもらう方法などを考えていく。また基礎的英語力も身につけていきたいと考えている。	

英語ⅡB	子どもたちの創造力・表現力を引き出すために、英語の児童文学・童話等を中心に学んでいく。その時代や地域を知ること、使われている英語や表現を知ることによって日常の暮らしを学ぶことができる。同時に読書への興味を持ってもらいたい。また英語力も身に付けていきたいと考えている。	
中国語Ⅰ	本授業は中国語初修の学生を対象とし、初歩的な発音、文法を学修することを目的とする。初歩的な文法事項をおさえながら、「読む・書く・聞く・話す」4技能の初歩を学修する。特に音読を繰り返し行うことで中国語の最大のハードルである発音をクリアし、中国語を口にする楽しさを覚えることを重点に行う。前期では発音記号であるピンインと基礎単語500語のマスターを目標とする。	
韓国語Ⅰ	初級レベルの韓国語を理解し、表現できる知識とスキルを習得することを教育目標とする。具体的には、「文字(ハングル)」、基本生活に必要な表現ルール(あいさつ、基礎単語、基礎的な表現ルール)を習得することで、短文を中心とした韓国語の文章を読む・話す・聞く・書く力をつける。	
中国語Ⅱ	本授業は中国語Ⅰを履修した学生を対象とし、基礎的な発音、文法を学修することを目的とする。入門から基礎レベルの文法事項をおさえながら、「読む・書く・聞く・話す」4技能の基礎を学修する。短文での読み書きや会話で相手に自分の考えを伝える力を養う。基礎単語500語から1000語のマスターを目標とする。	
韓国語Ⅱ	韓国語Ⅰで習得した初級レベルの知識を土台にして、「ハングル」能力検定試験の初級レベルの韓国語を理解し、表現できるスキルを習得する。また、語学力の習得と平行して、韓国語のコミュニケーションに必要な言語文化の習得も目指す。特に、多文化家庭の子どもと保護者とコミュニケーションができる語学力の習得を目指す。	
海外語学研修(英語)	マレーシア・ジョホールバル州にある本学の協定校である「南方学院大学」で2~3週間滞在し、英語の授業と多民族国家マレーシアの社会と文化を学ぶ授業を受ける。午前中は英語の授業、午後は文化系の授業と各種の文化体験などを予定している。現地滞在中基本的に英語でコミュニケーションをとり、英語漬けの生活を送る。生の英語を日々体験し、また多民族・多文化社会への理解を深めることが目標である。	
海外語学研修(中国語)	中国語圏の大学付属語学センターで2~4週間短期語学留学に参加し、中国語の総合的かつ実践的な運用能力を向上させることを目的とする。午前中は毎日中国語のレッスン、午後は各種文化体験や現地学生とのグループワークなどを予定している。これらの体験を通じ、中国語で思考することに慣れると共に、異文化理解の向上を促す。修了後は中国語検定試験4級合格を目標とする。	
海外語学研修(韓国語)	韓国にある本学の協定大学(「仁徳大学校」ソウル市、「済州大学校」済州島)で約1か月間滞在しながら、韓国語による授業を受ける。授業の合間には、韓国文化を体験するプログラムにも参加できる。韓国語ができない学生も参加できる。ただし、授業代、教材費、滞在費(大学の寮を利用)、交通費(韓国国内外)は自費である。	

情報・ICT	情報処理 I	近年、社会の情報化が進み、保育園や幼稚園での保育活動や園務を行う上で、ICT機器をはじめとする多様なメディアを活用できる能力が求められる。本講義では、演習を通して、ICT機器やアプリケーションなどの基礎知識や基本的な操作方法を身につけ、大学のレポート課題や保育の現場での活用方法について検討する。また、ICT機器やコミュニケーションツールなどを、安全に利用するために必要な情報モラルや情報セキュリティの知識についても理解を深める。	
	情報処理 II	「情報処理I」では、文書作成やプレゼンテーションなどアプリケーションを用いて、他者に情報を分かりやすく伝えるスキルなどを養う。さらに「情報処理II」では、表計算ツールを用いて、データ集計や統計処理方法を身につけ、園務の効率化を図るためのスキルなどを養う。	
	プレゼンテーション演習	本講義では、自らの考えなどを示し、他者の行動を促すために、社会で求められている能力の1つである「プレゼンテーション」について、基本的なプレゼンテーションの方法や必要なスキルを扱う。大学の卒論発表や保育の現場で活用できるよう、個人やグループでの演習を通じて、内容を構成し、それに合わせた視覚資料を作成し、聞き手を意識した効果的なプレゼンテーションができる力を養う。	
専門教育科目	教育原理	人間は一生（誕生から死に至るまで）変容し続け、成長を遂げていくものである。本講義ではまず、「教育・保育とは何か」「こどもとは何か」「人間にとってそもそもなぜ教育・保育は必要なのか」という根本的な問いについて議論する。つぎに、教育・保育という営みの必要性和可能性について様々な思想を読み解きながら、理念的・歴史的・制度的に考察する。つづいて、教育法規・制度の成立と展開を辿りながら、現在の学校教育および保育の役割や課題、学校・保育所と地域との連携について検討する。その上で最終的に、生涯学習と特別支援教育とも関連づけながら教育・保育の現状と今後を展望し、将来教育・保育の実践者としての自らの仕事を理解するための基礎を身につける。	
	保育者論	本講義は、「なぜ自分は教師・保育者を希望しているのか」「教職・保育とはどのような仕事なのか」という問いから教職・保育について、また教師・保育者としての自己像について深く考えることを目的とする。まず、教職・保育の本質と意義について原理的に考察する。つぎに、教師・保育者という仕事と役割、資質能力、職務内容等について概観する。つづいて、教職・保育の歴史の変遷を辿りながらその理念、制度、実態などについて多角的に検討する。それらを踏まえて、教師・保育者としての仕事に求められる専門的特性と社会的使命について、教職・保育の在り方と関連づけて吟味する。その上で、教師・保育者としての資質向上とキャリア形成、またプロフェSSIONAL性を構成するものについて理解を深める。	
	教育心理学	人間はどのように発達し、どのように学ぶのかという知見と学びがどのようにリンクしていくのかを明らかにしていきます。学習についての心理学的な知見をベースに、教育に対する様々な考えかたや学校不適応の問題などについて、具体的なトピックや事例を多く紹介しながら解説していきます。	

保育原理	<p>子どもを保育する上で必要とされる基礎・基本を学ぶ。第1回～第4回では子ども観、保育の意義及び目的、法令及び制度、第5回～第11回では保育所保育指針等における保育の基本や計画と評価を理解するとともに、第12回～13回では保育の思想や歴史的変遷を知り、第14回～第15回では保育の現代的課題について考察する力を養うことを目標とする。授業形態は、講義を受け、グループワークやディスカッションを行い、一人ひとりが主体的に参加する形を取る。</p>	
保育・教育課程論	<p>保育・教育課程（カリキュラム）とは、個々の具体的な授業・活動に先立って計画的に編成されるものである。そのためには、こどもの心身の発達や環境などを正確な「こども理解」に基づいて、その全体的構造を理解しなければならない。本講義ではまず、保育・教育課程の基礎から応用に至るまでを、教師・保育者の資質能力などと関連づけながら考察する。つぎに、『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』等に基づき、各園において編成される教育課程および全体的な計画について、その意義や編成の方法について議論する。その上で、各園の実情に合わせてカリキュラム・マネジメントを実施することの意義、また小学校との連続性について検討する。</p>	
保育ICT演習	<p>幼稚園や保育園におけるICT活用に焦点を当て、具体的な視聴覚教育メディアや情報コミュニケーション手段の仕組みや特徴を分析・整理し、工夫・改善から活用するまでの過程を経験することにより、ICT教材の開発や活用の際に必要な知識や技能の習得を目指す。また、ICT導入の適否を目的に応じて、評価する力も養う。</p> <p>さらに、子どもたちや保護者、保育者が抱えるICTに関する課題にも触れ、自身の情報モラルや情報セキュリティの向上を図るだけでなく、保護者や子どもに指導できる力も身につけたい。</p>	
基礎演習Ⅱ	<p>保育者としての学びを深めていくにあたって、文章表現、データリテラシー、図表の作成方法の基礎の習得は必須である。この授業では、レポートの書き方のきまりや、自分の意見を他者に伝えるための表現方法を習得し、保育の専門性を高めるための学びにつなげることを目的とする。課題作文や記事の分析を通して、自分の考えをわかりやすく伝えたり、他者の考えを簡潔に要約したりといった文章表現技術を磨く。また、論文や報告書を読み解くためのデータリテラシーを身につけられるよう、統計学の基礎について概説する。さらに、パソコンを使って図表を作成したり、文献を引用してレポート本文を書いたりといった、レポート作成の基本的技法を修得する。</p>	共同
保育・幼児教育研究法Ⅰ	<p>卒業論文の作成に向けて、保育・幼児教育分野の研究に必要な研究法を修得し、レポートの書き方を身につけることを目標とする。さまざまな研究法のうち、ここでは教材を開発し評価する実践研究と、保育現場に向かい子どもたちの活動に参加しながら記録をとる観察法を取り上げ、研究者の視点から保育・幼児教育をとらえる力を養う。ペーパーサートを作成し、子どもたちの前で実際に演じることを通してよりよい演じ方を検討する実践研究と、参加観察研究を体験し、レポートを作成する。</p>	

保育・幼児教育研究法Ⅱ	卒業論文の作成に向けて、保育・幼児教育分野の研究に必要な研究法を修得し、レポートの書き方を身につけることを目標とする。さまざまな研究法のうち、ここでは質問し調査を実施して量的データに基づく分析を行う調査法と、インタビューを通して得られた質的データに基づく分析を行う面接法を取り上げ、教材の作成や保育現場の観察を通して、研究者の視点から保育・幼児教育をとらえる力を養う。調査法と面接法について、その方法と留意点を講義で学び、実際に体験してレポートを作成する。	
保育・幼児教育研究Ⅰ	保育・幼児教育研究では、これまでに学んできた幼児教育、保育、特別支援教育の学修を体系的にまとめ、さらに専門的に探求する力を養い、卒業研究・卒業論文につなげることを目的にする。保育・幼児教育研究Ⅰでは、興味・関心をもとに様々な専門書等から情報収集を行い自分の関心のある学問に慣れ親しむことや、関心のある研究領域の概要を知ること、教員や友人と関心のある内容について積極的に語ること、さらには質問紙調査や行動観察法、実践研究など様々な研究法を知ることや、論文に触れその構成や探し方を知ることなどを学ぶことになる。このようにして情報を整理しながら「研究とは何か」について考え、「自分は何を研究したいのか」を見いだして焦点化を図ることにつなげる。	共同
保育・幼児教育研究Ⅱ	保育・幼児教育研究Ⅱでは、「何を研究したいのか」という自分への問いをもとに文献講読を進める。はじめは教員が紹介する参考文献を読み進め、著者の問いや視点を読み取り、その内容や結論をまとめることで論文の構成に慣れることになる。さらには、各自の関心をもとに先行研究の論文を検索し読み進める。その中で専門用語の定義や知らない言葉を確認したり、重要なところ、分からないところ、自分は意見が違うところをまとめたりする。そして、これらについてプレゼンテーションしたり、他のゼミ生と意見交換したりしながら、先行研究の流れをつかみ各自の問題意識を焦点化する。それらをもとに研究の構想を立てて、指導教員と相談しながら各自の研究テーマと研究計画を考えていくことにする。	共同
保育・幼児教育研究Ⅲ	保育・幼児教育研究Ⅲでは、各自の専門的研究となる研究テーマを決定することと関連する論文をさらに講読することを進めながら、研究計画を練り上げるとともに、日程や関係者との打ち合わせ、調査紙や教材の準備などの準備を進め、教育研究に着手することになる。教育研究は学生各自が一人で進めるだけではない。指導教員との協働作業であり報告・連絡・相談が重要なこと、資料やデータの収集には人間関係が大切であること、もちろんゼミ生同士の励まし合いや情報交換などのコミュニケーションも大切なことを踏まえて研究を進めることにする。このようにして研究を進め、記録にまとめ結果を整理して卒業論文の執筆につなげる。	共同

	保育・幼児教育研究Ⅳ	<p>ここまで各自の興味・関心のあるテーマの全体像を捉えることから始めて、関連する先行研究の論文を読み進め各自の問題意識を焦点化した研究テーマにより研究を進めてきた。保育・幼児教育研究Ⅳでは、各自が進めた教育研究の結果をまとめて評価を行い、考察につなげる。その際にも自己の研究課題を振り返ることや、先行研究と比較するために新たな論文を読み進めることや、途中経過をプレゼンテーションして考察に関わる協議をするなどの作業を行う。さらには、2年間にわたって進めてきた保育・教育研究の歩みが今後生きるよう振り返ることや、協力をいただいた園・施設等への報告と御礼等も含めた全体のまとめを行うことにする。</p>	共同
	卒業研究・卒業論文	<p>卒業研究・卒業論文では、保育・幼児教育研究Ⅰ～Ⅳで深めてきた内容をまとめるとともに、先行研究や幼児教育、保育、特別支援教育に関するこれまでの学びも踏まえて結論につなげ、卒業論文を執筆する。そのために、これまでに講読した論文も参考にしながら、卒業論文の構成、研究の目的や方法など各章の書き方、目次の作成、図表や引用文献の示し方等を確認する。その上で組み立てを考へて論文を執筆する。さらに、点検と推敲を重ねて卒業論文を大学教育の集大成としてまとめ上げることを目指す。論文執筆後は研究成果を効果的に伝えるためのプレゼンテーションを作成する。最後に、卒業研究・卒業論文発表会で研究成果を報告し、討論を経て相互評価を行う。</p> <p>① 矢野潔子 「保育現場や保育士が勤務する福祉施設等に係る課題の研究指導を行う。」</p> <p>4 古田弘子 「聴覚・言語障害児に係る課題の研究指導を行う。」</p> <p>② 鄭 英美 「地域の子育て支援施設の現場参加を通して得られる課題の研究指導を行う。」</p> <p>7 吉田道広 「自立活動の指導と支援を進める環境整備等に係る課題の研究指導を行う。」</p> <p>⑤ 安村由希子 「児童文化財の理解と創作・実演に係る課題の研究指導を行う。」</p> <p>14 大江登美子 「造形表現活動及び活動支援等に係る課題の研究指導を行う。」</p> <p>⑥ 増田吹子 「保育現場における保育・幼児教育の実際に係る課題の研究指導を行う。」</p> <p>⑦ 溝上義則 「絵画療法の心理的な効果に係る課題の研究指導を行う。」</p>	共同
	保育内容総論	<p>保育内容を総合的に捉え、幼稚園教育要領や保育所保育指針や幼保連携型認定こども園教育・保育要領のねらいと内容を中心に、保育の基本・指導の在り方、各領域の捉え方を理解し、総合的に指導することの重要性について学んでいきます。子どもの生活や遊びなどは、各領域の間で相互に関連を持ちながら総合的に展開されるものであることを学びます。</p>	

保育内容-健康	<p>本講義は、人間の身体や健康をとりまく環境について理解を深め、子どもの健康の維持・向上を図るうえで必要な指導・援助に関する知識・技能を獲得することをねらいとする。健康教育や体育指導に関する実践的内容をもと、教育学、心理学、医学、運動学など諸領域からも情報を集める。現代の子どもを取り巻く「健康」の実態を理解し、子どもの健康、運動発達、運動遊び、生活習慣や生活リズムなどに関する事項について理解を深める。到達目標としては、1. 子どもの健康の維持・向上を図るとともに、子どもの発育・発達を促すうえで必要な指導・援助に関する知識を身につける。2. 健康教育や体育指導に関する実践的内容をもとに、教育学、心理学、医学、運動学の諸領域の文献からも情報を得、「健康」を包括的に理解することを目的とする。</p>	
保育内容-人間関係	<p>幼児教育の発達の基盤の一つである人間関係についてその理念と方法のあり方について理解し、人が誕生直後から幼児期にかけて他者との間に築いていく関係性について知り、それらがその後の社会性や人格の発達とどのようにかかわっていくのかを論じます。主としてアドラー心理学・選択理論心理学的視点より人間関係を理解します。</p>	
保育内容-環境	<p>本授業では、幼児期の育ちや学び、生活の特性を踏まえながら、事例や実際に様々な環境と相互に関わりながら生活をする幼児の姿をもとに、環境がもつ意味や意義を理解する。幼児教育において、環境という言葉が内包するものは実に多岐にわたる。具体的には、物的環境・人的環境、社会環境・自然環境といった分類を中心にしつつ、その他、空間、音、色、安全・安心の環境、地域社会、伝統・文化、数量・図形、標識・文字等が該当する。保育者はこうした環境を踏まえ幼児の生活や遊びの展開を支えると共に、育ちや経験を保障することが重要である。また、幼児期の自然体験の重要性を踏まえ、受講生自ら自然に触れる体験をすることで、保育者に求められる感性を養うとともに、教育内容に関する専門的な知識と技能を身に付ける。</p>	
保育内容-言葉	<p>この授業では、領域「言葉」の指導の基盤となる、幼児が豊かな言葉表現を身に付け、想像する楽しさを広げるために必要な専門的事項に関する知識を身に付ける。そのためにはまず、人間にとって言葉の意義や機能を理解する。次に、話し言葉と書き言葉の共通点や相違、子どもの言葉の発達過程と支援方法についても取り上げる。また、幼稚園教育要領「言葉」のねらいや内容、新改訂で新しく加わった「言葉にそのためには関する感覚」について取り上げ、言葉の美しさ、楽しさを体験する。加えて、子どもが自ら児童文化財（絵本、紙芝居、物語等）に親しむ体験を観察したり、模擬保育をしたりして子どもの文化財への関わりを深める方法について考察する。</p>	
保育内容-音楽表現	<p>領域「表現」が扱う、環境において現れる幼児の音楽的表現様式の諸相について、その多様性に着目しながら実践的に学び、発達段階を踏まえて創造性を伸ばすための表現力や支援力を身につける。授業計画の中では、具体的に、音楽と自然な動きや身の周りの物、お話、絵などとの統合的表現、オノマトペ、即興的表現、音環境、合奏、手作り楽器といった幼児の多様な表現を扱う。また、幼児の音環境の一つとして、保育者自身が簡易な音楽を創作する方法も扱う。</p>	

保育内容-造形表現	<p>領域「表現」、特に造形表現の指導に関する、子どもの表現の姿やその発達及びそれを促す要因、子どもの感性や創造性を豊かにする様々な造形表現遊びや環境の構成などについて実践的に学び、乳幼児期の表現活動を支援するための知識・技能、表現力を学習する。グループでの活動やプレゼンテーションも合わせ行い、協働性やコミュニケーションの力も身に付ける。</p> <p>さまざまな描画材、身近な素材、用具、ICT機器を使用し、実際に造形表現活動を行なって振り返る。子ども文化財や表現する子どもの姿についても学び、子どもの表現について総合的に学ぶ。</p>	
健康の指導法	<p>本講義は、幼稚園教育要領の領域「健康」のねらいと内容及び内容の取扱いについて理解し、健康な心とからだを育て、自ら健康で安全な生活を作り出す力を養うために必要な知識・技術を身に付けることを目指す。さらに、乳幼児期の健康にかかわる生活習慣、心身の発育・発達、運動発達の特徴についての理解を深め、適切な指導方法を身に付けることを目指すものである。到達目標としては、</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 幼稚園教育要領と保育所保育指針に示された乳幼児教育の基本を踏まえ、領域「健康」のねらい及び内容を理解する。 2. 幼児の発達・学びの過程を理解し、領域「健康」に関わる具体的な指導場面を想定した保育を構想する方法を身に付ける。 	
人間関係の指導法	<p>幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領に示された領域「人間関係」のねらいを達成するための実践についての知見について理解します。幼児の発達に即して主体的・対話的な深い学びを背景として、想定した保育場面での情報機器および教材を用いたロールプレイ等を用いて保育を構想する方法を身につけます。</p>	
環境の指導法	<p>本授業では、幼稚園教育要領に示された領域「環境」のねらい及び内容についての理解を深め、事例を参照しながら保育現場で行われている領域「環境」を中心とした保育実践の実際を理解する。ねらい及び内容の解説と共にそれに応じた実際の幼児の遊びの様子や具体的な環境の構成を学ぶことで、実習や現場に出てからの実践に応用できるようになることを目標としている。さらに、受講生自らがキャンパス内の自然に触れる遊びや活動を体験するとともに、その体験を基にして具体的な遊び・生活の場面を想定しながら保育の構想(指導案の作成及びグループでの模擬保育)を行う。また模擬保育後には振り返りの協議会を行い、課題と反省を抽出する。これらの過程を通して現場での実践に求められる指導法を習得する。</p>	
言葉の指導法	<p>幼稚園教育要領の領域「言葉」の内容を踏まえつつ、幼児の言葉を豊かにする実践について理解し、その具体的な方法を取り上げる。そのためにはまず、幼稚園教育の基本と領域「言葉」のねらい及び内容について再度振り返りを行う。また、言葉を生む基盤と話し言葉の発達の道筋、書き言葉の発達の道筋と小学校における書き言葉について概観する。また、言葉を育む環境構成と援助、子どもの言葉を豊かにする教材(絵本・物語・紙芝居など)の実際と保育の中での生かし方についても学びを深める。また、言葉に対する感覚を豊かにする実践を紹介し、その後保育実践もしくは模擬保育に向けての保育観察と教材研究に進む。最後は子どもの言葉を育む保育の構想を目的とし、領域「言葉」に関する具体的な保育場面を想定した指導案の作成と展開が出来るようにする。</p>	

表現（音楽）の指導法	幼稚園教育要領に示された領域「表現」のねらい及び内容を理解し、幼児の発達と学びの課程と指導上の留意点について理解を深める。具体的には、幼児の心身の発達を踏まえ、音楽活動における保育者の援助、子どもの日常生活における音楽表現の指導法について、実践を行いながら習得する。指導案作成や模擬保育を行う際には、指導案の構造を理解するためにICTの活用も行う。さらに、幼児の活動が小学校での学習や生活とどのように関連するかについても理解する。	
表現（造形）の指導法	幼稚園教育要領「表現」領域におけるねらいと内容について、子どもの発達過程に基づいた特徴や題材、指導方法について理論を理解し、演習や模擬保育などを通して実践的に学び、造形表現における材料体験、環境構成、指導方法などについて具体的な指導場面を想定しながら学習する。グループでの活動も合わせ行い、協働性やコミュニケーションの力も身に付ける。 乳幼児期の発達段階に応じた造形表現活動を体験的に学び、保育の構想をして模擬保育の計画、実践、振り返りをする。ICT機器を使用しながら保育の評価方法についても学び、乳幼児期の表現活動を支援するための知識・技能、表現力を身に付ける。	
複合領域の指導法Ⅰ	「幼稚園教育要領（文部科学省）」においては、5領域の内容を相互に関連させ、全体的に指導していくことが重要視されている。そこで、本科目では、絵本を活用した複数の表現活動を行い、0～2歳児における子どもの感性や表現力、言葉等を豊かにする活動について理解を深める。第二点に、自然物（石、木など）を使った楽器作りを行い、自然へ直接触れる体験と自然を通して育まれる豊かな感性についても考察する。 （オムニバス方式/全15回） ⑤ 安村由希子/2回）幼稚園教育要領を基に幼児教育の目標と5領域についての振り返りを行う。（1回）また15回目の授業において複合領域のまとめを行う。（1回） ⑩ 森みゆき・⑤ 安村由希子/8回）絵本を活用した表現活動の指導を行う。（共同） ③ 田中卓也・⑩ 森みゆき/5回）自然物を用いた楽器作りと発表の指導を行う。（共同）	オムニバス方式
複合領域の指導法Ⅱ	複合領域の指導法Ⅰを基に、実際の子どもの姿を基に、絵本を土台とした複合的な活動を学生たちが自ら考える。特に、園での発表会をイメージし、模擬保育を展開することとする。 具体的には①隣接する附属こども園に行き、遊んでいる子どもの姿を複合的視点から観察する。②次に、「複合領域の指導法Ⅰ」を参考に絵本を使った表現活動をグループで考え、模擬保育を展開する。 （オムニバス方式/全15回） ⑤ 安村由希子/3回）5領域や複合領域について振り返る。（1回）絵本の選定の指導を行う。（1回）15回目に複合領域のまとめを行う。（1回） ③ 田中卓也/1回）子どもの遊びの観察とねらいの設定の指導を行う。 ③ 田中卓也・⑩ 森みゆき・⑤ 安村由希子/11回）複合領域の活動案の指導を行う。（5回）また模擬保育の指導（5回）、模擬保育の振り返り（1回）を行う。	オムニバス方式

教育・保育の知識・技能	教育方法論 I	教育・保育方法とは、教育・保育実践の論理と技術について原理的に探究することを目的とし、その意味で乳幼児教育における重要な専門分野を構成するものである。本講義ではまず、これまでの西洋および日本（戦前・戦後）における教育・保育方法の基礎理論を辿りながら教育・保育実践についての考え方について概観する。つぎに、実際の教育・保育現場をどのように構想・分析したらよいかに関し、こどもの発達および物的・人的・社会的環境を勘案し、その具体的な手法について検討する。さらに、これからの時代を生きるこどもたちの姿を見据えて、乳幼児教育・保育に必要なツールと専門的技術を開発するとともに、情報機器や最先端の教材を活用するための基礎的および発展的な知識・技能を身につける。	
	教育方法論 II	本授業では、幼児が園での生活を通して、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を身につけることができるように環境構成の工夫や言葉かけ等の情報伝達の特性に加えて、ICTの活用、指導のための教材の工夫、指導計画の設計・実施・分析・評価・改善（PDCAサイクル）の方法など、教師自身が、幼稚園の現場でより良く子どもを導くために必要と考えられる知識と方法等を取り扱う。その際、小学校との連携も視野に入れて、教師としての「情報活用能力」の育成も検討する。 また、この授業そのものを、「教育方法を検討する”場”」と考え、タブレット端末をはじめとするICT機器や様々なメディアの利活用体験も試みる。具体的には、ICT機器やビデオカメラ等での教育活動の記録と分析、評価と改善など、情報モラル教育も含めた体験を通して、効果や特徴等を検討してもらうとともに、自らの教育行為を評価するための観点を養うこともねらいとする。	
	幼児理解	保育者は、子どもひとりひとりを理解し、それぞれの発達課題を明らかにし、最適の保育を行うことが求められる。この授業では、子どもの世界を読み取っていく実際について理解し、保育実践に活用していくことを目指す。乳幼児期の子どもの発達についての知識を身につけ、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を描きながら、ひとりひとりの子どもに合わせた保育者の援助について考える。また、現代の子育てを取り巻く状況を知り、保護者の感じる不安に応えるとともに子どもの成長を支えていく方法について学ぶ。さらに、社会や保護者にとっての「子ども」という存在について考察し、保育者に期待される役割について理解を深める。	
	教育相談	幼児や児童は、様々な問題に直面しながら、成長していく存在です。教育相談は、幼児や児童が周囲の人とあるがままの良さを理解し尊重し合える関係を構築したり、自らをコントロールすることで問題を克服し自己成長していく過程を支援する活動です。本科目では人間性心理学をベースとして選択理論心理学やアドラー心理学の視点から支援の実践を学びます。	
	音楽基礎	五線譜を構成する諸要素を分析的に学び、読み方を目で見て考えるとともに、実際に音を出して確かめることで、実感を伴った理解と実践に結びつける力を身につける。音符、休符、五線、音部記号、拍子、変化記号、音階、調、音程、転調、移調、標語、和音、コードネームといった、幼児のための歌を扱う上で欠かすことのできない種類の楽典を理解することによって、弾き歌いを行うために必要な基礎力をつける。	

器楽Ⅰ	保育における子どもの音楽活動を支える基礎的技術を身に身に付けることを目的とし、ピアノの技能を習得する。この授業で培われる技能は、保育内容音楽表現、音楽の指導法等の授業の理解を深め、応用力を身に付けることに繋がる。授業は、学生の習熟度に合わせて個人レッスンとグループレッスンの形態で行う。特に、これまでにピアノの学修経験のない学生は、グループレッスンで行う。学修内容は、バイエルと子どもの歌の弾き歌いである。バイエルは、ピアノの演奏に必要となる読譜力や基礎的な運指法の理解のために採用する。バイエルと子どもの歌からなる全33曲の課題曲を提示しており、学生の進度に合わせて学修を進める。	共同
器楽Ⅱ	原則として器楽Ⅰでピアノの基礎を学修した学生が履修する。バイエルと子どもの歌の弾き歌いを、学生の進度に合わせて進め、保育における子どもの音楽活動を支える基礎的技術を身に付けることを目的とする。各学生の習熟度により、個人レッスンまたはグループレッスンの形態で授業を進める。器楽Ⅱの到達目標は、バイエル終了程度の演奏技能を身に付けることである。器楽Ⅰと器楽Ⅱでは共通する全33曲からなる課題曲を提示しており、器楽Ⅱ終了時に全33曲を終了することを目標にしている。	共同
器楽Ⅲ	原則として器楽Ⅱを終了した学生が履修する。器楽Ⅲでは、器楽Ⅰ・Ⅱで習得したピアノの基礎的技術をさらに発展させ、子どもの歌の弾き歌いを充実させることと簡単な伴奏法を習得することを目的とする。子どもの歌の弾き歌いとピアノ小品からなる全37曲の課題曲を提示し、進度に合わせて学修する。伴奏法では、キーボードを用いたリズムやコードの演奏技術を習得するが、これは日常の保育や発表会等での豊かな音楽表現につながる。	共同
器楽Ⅳ	原則として器楽Ⅲを終了した学生が履修する。器楽Ⅳでは、子どもの弾き歌いを充実させること及び簡単な伴奏法を習得することを目的とする。伴奏法では、器楽Ⅲで習得した技術をさらに応用できる方法を学び、コードの理論への理解を深め、対応できる楽曲の種類を増やす。器楽Ⅲと器楽Ⅳでは共通する全37曲からなる課題曲を提示しており、学生の進度に合わせて学修するが、器楽Ⅳ終了時には規定の曲数を学修することを目標としている。	共同
食育論	食育の基本的な考え方と幼稚園・子ども園・保育所等における食育の指針や食事提供のガイドラインを学修する。また、特別な配慮を要する子どもの食生活について学び、適切な食事支援について理解を深める。さらには、実際に食育教材作りや模擬授業を行い、教員としての資質・能力を身に付ける。	
子どもの保健	子どもの心身の健康増進を図る保健活動の意義および子どもの身体的な発育・発達、保健について理解する。さらに、子どもの健康状態とその把握の方法、子どもの疾病と予防方法について、反転学習、ディスカッション等も一部授業に取り入れ学びを深める。また、子どもの保健に関する課題について自ら発見し、解決に導くことができる力を養う。	

子どもの食と栄養	<p>保育士は、乳汁期から、離乳期、幼児期、学童期、青年期まで、幅広い年齢層と関わりを持つ職種である。そのことから、ライフステージごとの食行動や発達過程の特殊性を理解し、その時期における子どもの食に対する支援について、演習をとおして学ぶ。また、子どもの食に対する支援は多岐にわたり、保育の現場では個別対応が必要な場面もあることから、その事例について紹介をし、理解を深める。“食事”は目で見る媒体であり、食育につながることを体感し、ライフステージごとの適切な食の選択と食べ方を学ぶ。</p>	
身体表現	<p>本講義は、幼稚園教育において育みたい資質・能力を理解し、「幼稚園教育要領」に示された「表現」領域のねらい及び内容について背景となる専門領域と関連させて理解を深めるとともに、幼児の発達に即して、主体的・対話的で深い学びが実現する過程を踏まえて具体的な指導場面を想定して保育を構想する方法を身に付ける。到達目標としては、1. 「幼稚園教育要領」に示された幼稚園教育の基本を踏まえ、「表現」領域のねらい及び内容を理解する(知識・理解)。2. 特に「表現」領域における身体表現の特性を認識する(技能・表現)。3. 幼児の発達や学びの過程を理解し、具体的な指導場面を想定して保育を構想する力を身に付ける(思考・判断・伝達・コミュニケーション)。</p>	
乳児保育 I	<p>乳児保育(3歳未満児)における養護及び教育について理解を深め、乳幼児保育の現状と課題から乳児保育の意義や目的、保育者としての役割について学修する。また、3歳未満児の生活や遊びと環境について、発育・発達を踏まえた子育て支援や保育者への関わり方を検討する。さらに職員間の連携や協働、保護者や地域関係機関との連携について課題を把握し、解決方法について考察する。</p>	
乳児保育 II	<p>3歳未満児の発育・発達の過程や特徴を踏まえた援助や関わり、養護及び教育の一体性を踏まえた子どもの生活や遊び、保育の方法及び環境について、実技演習やグループワーク等を通して具体的に学ぶ。また、乳児保育における配慮(配慮事項)について、事例から検討する。さらに、乳児保育の長期的な指導計画及び短期的な指導計画、個別の指導計画及び集団の指導計画を作成し、その内容について相互評価等を行いながら理解を深める。</p>	
子どもの健康と安全	<p>保育における保育的観点を踏まえた保育環境や援助について、保育所保育指針や保育の現場のニーズ、保育所における感染症やアレルギー及び事故防止ガイドラインを踏まえ、子どもの発達や状態に即した具体的対応について理解する。また、特別な支援を必要とする子どもの指導や支援方法について、具体的な事例を通して検討する。さらに、疾病や障害への個別対応だけでなく、子どもの心身の健康増進と健やかな生活の確立を目指して、保育所全体における健康及び安全の確保について、ディスカッションやグループワーク等を通して学びを深める。</p>	

基礎演習 I	この科目は初年次教育科目であり、保育者になるための学びをはじめるとあって、保育に関する基礎知識の幅を広げ、学びへの意欲を高めることを目的とする。まずは保育者の仕事や保育、福祉の現場について概説する。次に、附属こども園での観察に向けて、実習生としてのマナーや観察・記録の方法の基礎について演習を通して実践的に学ぶ。附属こども園での観察を経験した後、観察を通して得られた記録をもとにグループ討論を行い、子どもの実態をとらえる方法や、他者と協働して保育を構想する方法について考察する。グループ討論において自分の意見を発表したり、他者の意見を取り入れたりする経験を重ねることで、保育の専門性を高めるための学びにつなげる。	共同
教育実習 I	教育実習 I では、附属こども園において1週間の教育実習を行う。教育実習 I の主な目的は、一つに保育、子ども、保育者、環境の観察と、それら観察した姿や事象を記録することである。また、二つには保育補助としての立場で、保育に参加することを通して、子どもや保育者の園生活の実際を体験することにある。実習生自らが体験的に理解を得ることで、子どもの生活や遊びの展開と見られる育ち、保育者指導・援助、環境の構成についての学びを重視する。また、実習期間中の実習指導者からの指導や助言を受け、自身の課題や反省を抽出する。さらには、保育者のイメージや保育職への理解を構築するとともに、自身の理想とする保育・保育者像について考えを深め、今後の実習や大学での授業の学びに対しての見通しをもつことができるようにする。	共同
教育実習 II	教育実習 II では、学外の幼稚園等において3週間の教育実習を行う。教育実習 II は4年次の前期に設定されていることからわかるように、これまでの実習や大学での授業等で習得した幼児教育・保育に求められる専門的かつ体系的な知識・技能についての理解・習得度を実践を通して確認する。具体的には3週間という期間の中で、クラスや幼児の実態を捉え、それに基づいたねらいと内容から、保育の指導計画案を立案し、責任実習（部分実習、一日実習）を担う。また、責任実習の実施後は、実習指導者らと共に振り返りを行い、実践的・技術的な課題を探る。このようなことから教育実習 II は卒業後に幼稚園教諭として職務に当たるうえでの総まとめとして位置づける。	共同
教育実習指導 I	この授業では、附属こども園にて行う1週間の教育実習 I (2年次後期)における事前・事後指導を行う。教育実習 I では、幼児の生活や遊びの姿と保育者の関わりや環境構成の実際を観察及び保育参加を通して理解する。したがって、事前指導では、実習の目的と意義を理解するとともに、保育現場に入る際の実習の内容や心得、注意事項を踏まえつつ、幼児と保育者の観察の方法、実習記録の作成の方法を学ぶことを中心的な内容とする。また事後指導においては、実習において出会った幼児や保育者の姿の場面記録を基に報告をし合うことにより、振り返りを行うことで保育において求められる保育者の専門的な指導や援助の在り方や自身の課題等について理解を深める。	共同

教育実習指導Ⅱ	この授業では、学外の幼稚園等で行う3週間の教育実習Ⅱ(4年次前期)における事前・事後指導を行う。教育実習Ⅱでは、実習を行う園やクラス、幼児、環境等の実態を踏まえ、実際に保育指導案を作成し責任実習を行うことで、実践的な保育の知識・技能を習得することを目標とする。したがって、事前指導においてはクラスや幼児の実態を踏まえた保育指導案の作成の方法と実際に幼児の前に立ち保育を行う際の実践的な知識・技能を学ぶことを中心的な内容とする。事後指導においては、実習で得られた学びや課題を学生同士で振り返ることにより自身の保育実践を省察することで、実践に求められる諸能力を形成することを中心的な内容とする。	共同
保育実習ⅠA	この科目は保育士養成カリキュラムにおける告示科目、「保育実習」の系列に位置づけられる保育士必修科目である。保育実習ⅠAは、保育所において見学・観察・参加を主体として、概ね10日間、80時間以上の実習を行う。実習では、保育所における保育・教育活動について、保育所保育指針や実習施設の保育計画、子どもの発達等と関連づけながら理解を深める。さらに、保育の環境構成および保育士等の援助や配慮、安全対策等の実際について、観察や参加を通して学ぶ。また、実習中は実習記録に基づく省察および自己評価を行い、実習課題をもって臨む。 なお、本科目は、実習科目の指導経験が豊かな教員(大江)および保育士資格を有する者(矢野・増田)、「保育実習ⅠB」の科目担当者(尾関)等による複数教員で担当する。	共同
保育実習ⅠB	保育実習ⅠBは、保育所以外の児童福祉施設およびその他の社会福祉施設において概ね10日間、80時間以上の実習を行います。保育実習ⅠBは、基礎実習として、見学・観察・参加が主体となります。しかし、実習先によっては部分指導、および半日指導の責任実習をする場合もあります。施設生活への参加を通じて、施設利用児・利用者への理解を深めます。また、各施設の役割・機能と、施設保育士の職務について学びます。	共同

	保育実習指導ⅠA	<p>この科目は保育士養成カリキュラムにおける告示科目、「保育実習」の系列に位置づけられる保育士必修科目である。保育実習指導ⅠAは、保育実習ⅠAの事前指導および事後指導として位置づけ開講する。</p> <p>事前指導では、保育実習ⅠAに向けて、実習の意義や目的・内容ならびに実習施設の機能や役割、職務内容等について理解し、実習前の課題を明確にする。また、実習記録の書き方、実習中のマナーや個人情報取り扱いについても学ぶ。</p> <p>事後指導では、実習経験を通して各自が学んだことをグループワークによるディスカッション等により課題の共有を行う。さらに、自らの実習内容について振り返り、今後の課題について明確化する。</p> <p>なお、本科目は、実習科目の指導経験が豊かな教員（大江）および保育士資格を有する者（矢野・増田）、「保育実習ⅠB」の科目担当者（尾関）等による複数教員で担当し、各実習科目の連携を図る。</p>	共同
	保育実習指導ⅠB	<p>授業目標：この科目は保育士養成カリキュラムにおける告示科目であり、「保育実習」の系列に位置づけられる保育士必修科目である。この科目の到達目標については以下のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 保育実習の意義・目的を理解する。 2. 実習の内容を理解し、自らの実習の課題を明確にする。 3. 実習施設における子どもの人権と最善の利益の考慮、プライバシーの保護と守秘義務等について理解する。 4. 実習の計画・実践・観察・記録・評価の方法や内容について具体的に理解する。 5. 実習の事後指導を通して、実習の総括と自己評価を行い、今後の学習に向けた課題や目標を明確にする。 <p>授業計画：保育実習ⅠAに引き続き、保育実習ⅠBに向けて事前指導を行う。実習ⅠB終了後は、事後指導として実習の総括を行い、自らの実習課題と次の実習目標を明確にしていく。評価については提出物（100%）で評価をおこなう。</p>	共同
	保育実習Ⅱ	<p>この科目は保育士養成カリキュラムにおける告示科目であり、「保育実習」の系列に位置づけられる保育士必修科目である。</p> <p>実習期間は3年次後期の10日間とし、保育所において実習を行う。保育実習ⅠAでの学びを踏まえ、観察・参加を通して、保育所の役割と機能、子育て支援の取り組み、子どもの心身の状態や行動、保育士の業務と業務倫理についてさらに理解を深める。また、実習後半では、作成した保育指導計画（指導案）を基に保育を実践し、省察を通して改善する過程について学ぶ。</p> <p>なお、本科目は、実習科目の教育経験が豊かな教員（大江）を中心に、保育士資格を有する者（矢野・増田）等による複数教員で担当する。</p>	共同

	保育実習Ⅲ	<p>授業目標：この科目は保育士養成カリキュラムにおける告示科目であり、「保育実習」の系列に位置づけられる保育士必修科目である。この科目の到達目標については以下のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 既習の教科や保育実習の経験を踏まえ、児童福祉施設等（保育所以外）の役割や機能について実践を通して、理解する。 2. 家庭と地域の生活実態にふれて、子ども家庭福祉、社会的養護障害児支援に対する理解をもとに、保護者支援、家庭支援のための知識、技術、判断力を習得する。 3. 保育士の業務内容や職業倫理について具体的な実践に結びつけて理解する。 4. 実習における自己の課題を理解する。 <p>授業計画：施設実習を10日間実施する。評価については実習の評価を基本とし、実習中の状況、記録の状況等を総合的に勘案して評価する。</p>	共同
	保育実習指導Ⅱ	<p>この科目は保育士養成カリキュラムにおける告示科目、「保育実習」の系列に位置づけられる保育士必修科目である。保育実習指導Ⅱは、保育実習Ⅱの事前指導および事後指導として開講する。</p> <p>事前指導では、実習先決定の方法および保育実習Ⅱを実施するための必要事項について、こども教育学部・実習委員会「実習と保育・幼児教育（実習の手引き）」に沿って学ぶ。実習終了後に行う事後指導では、全体でのシェアリング他、個別に事後指導を行い、実習記録や保育所からの実習評価を基に実習を総括し、新たな学習目標を明確にする。なお、本授業は、保育実習Ⅱの科目教員が担当する。</p>	共同
	保育実習指導Ⅲ	<p>授業目標：この科目は保育士養成カリキュラムにおける告示科目であり、「保育実習」の系列に位置づけられる保育士必修科目である。この科目の到達目標については以下のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 保育実習の意義と目的を理解し、保育について総合的に理解する。 2. 実習や既習の教科目の内容やその関連性を踏まえ、保育の実践力を習得する。 3. 保育の観察、記録及び自己評価等を踏まえた保育の改善について、実践や事例を通して理解する。 4. 保育士の専門性と職業倫理について理解する。 5. 実習の事後指導を通して、実習の総括と自己評価を行い、保育に対する課題や認識を明確にする。 <p>授業計画：保育実習指導Ⅲでは、保育実習Ⅲを実施するための実習前指導を行う。実習終了後は、事後指導を行い、実習記録や実習評価を基に、実習の総括を行うことで、新たな学習目標を明確にする。評価については提出物（100%）で評価をおこなう。</p>	共同
	保育・教職実践演習	<p>この科目では、教職・保育者の意義や教員の役割、職務内容、子どもに対する責任、社会性や対人関係能力、子ども理解、保育の指導力等といった観点から学習を深める。また、保育カンファレンスを通して保育実践を省察することで、自らの保育実践力の課題を明確にする。加えて、自らの課題を克服し、現場に立つ教員・保育者としてふさわしい知識・技能を習得する機会を設ける。さらに、現職の現場保育者による講話を行い、卒業後に自身が現場で幼児の前に立ち実践を展開していくにあたってのイメージを高める。</p>	共同

子育て支援	子ども家庭福祉	<p>授業目標：この科目は保育士養成カリキュラムにおける告示科目であり、「保育の本質・目的に関する科目」の系列に位置づけられる保育士必修科目である。この科目の到達目標は以下のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 現代社会における社会福祉の意義と歴史の変遷及び社会福祉における子ども家庭支援の視点について理解する。 2. 社会福祉の制度や実施体系等について理解する。 3. 社会福祉における相談援助について理解する。 4. 社会福祉における利用者の保護に関わる仕組みについて理解する。 5. 社会福祉の動向と課題について理解する。 <p>授業計画：授業は、主に講義を中心に進めていくが、さらなる理解を深めるために、受講者には、事前に提示した課題について、授業中に発表する時間を設けるなど、積極的な授業参加を促しながら授業を進めていく。15回の授業を行い、評価については期末試験及びノート提出によって評価を行う。</p>	
	子ども家庭支援の心理学	<p>この授業では、一生涯にわたる人間の発達の変化を踏まえ、各発達段階における課題やそれぞれの段階に応じた養育者による援助について考える。まず、生涯発達の視点に立ち、子どもの発達と、各発達段階に応じた親子・家族関係の意義や機能を概説する。また、現代の子育てを取り巻く社会的状況とその課題を理解するとともに、乳幼児期の子どもの精神保健についても学び、保育者として、子育て中の親と子の両方を支えるような子ども家庭支援のあり方を考察する。</p>	
	子ども家庭支援論	<p>授業目標：この科目は保育士養成カリキュラムにおける告示科目であり、「保育の本質・目的に関する科目」の系列に位置づけられる保育士必修科目である。この科目の到達目標については以下のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 子育て家庭に対する支援の意義・目的を理解する 2. 保育の専門性を活かした子ども家庭支援の意義と基本について理解する。 3. 子育て家庭に対する支援の体制について理解する。 4. 子育て家庭のニーズに応じた多様な支援の展開と子ども家庭支援の現状課題について理解する。 <p>授業計画：授業は、主に講義を中心に進めていくが、さらなる理解を深めるために、受講者には、事例検討の時間を設け、自ら考える力を涵養する事を促しながら授業を進めていく。15回の授業を行い、評価についてはノート及び課題の提出によって評価を行う。</p>	
	子育て支援	<p>授業目標：この科目は保育士養成カリキュラムにおける告示科目であり、「保育の内容・方法に関する科目」の系列に位置づけられる保育士必修科目である。この科目の到達目標については以下のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 保育士の行う保育の専門性を背景とした保護者に対する相談、助言、情報提供、行動見本の提示等の支援（保育相談支援）について、その特性と展開を具体的に理解する。 2. 保育士の行う子育て支援について、様々な場や対象に即した支援の内容と方法および技術を、実践事例等を通して具体的に理解する。 <p>授業計画：授業は、主に演習を中心に進めていくが、さらなる理解を深めるために、受講者には、グループワーク等を活用した演習を実施し、チームの中で、自ら考え、発言し、まとめていく力を涵養する事を促しながら授業を進めていく。15回の演習を行い、評価についてはノート及び課題の提出によって評価を行う。</p>	

教育・保育の連携・協働	教育社会学	<p>保育と教育は保育者と子ども、あるいは教師と児童生徒のなかだけで営まれているわけではなく、子どもの住む家庭や地域、子どもたちが将来的に属することになる職業社会にいたるまで、さまざまな「社会」のなかで営まれている。それゆえに保育者は子どもの背景にある家庭や地域、社会を見据えながら目の前の子どもと向かい合う必要がある。本講義では具体的な事例にもとづきながら、社会学の視点を修得していくことで、子どもや教育者を取り巻く「社会」をとらえる方法を学ぶことを目的とする。また、保育者は家庭や地域社会といかに連携をしていくべきなのか、保育者に期待される役割とは何なのかについても考察していく。</p>	
	社会福祉	<p>授業目標：この科目は保育士養成カリキュラムにおける告示科目であり、「保育の本質・目的に関する科目」の系列に位置づけられる保育士必修科目である。この授業の目標は以下の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 現代社会における社会福祉の意義と歴史の変遷及び社会福祉における子ども家庭支援の視点について理解する。 2. 社会福祉と児童福祉及び児童の人権や家庭支援との関連性について理解する。 3. 社会福祉の制度や実施体系について理解する。 4. 社会福祉における利用者の保護に関わる仕組みについて理解する。 5. 社会福祉の動向と課題について理解する。 <p>授業計画：到達目標を達成するため、配布資料を中心として講義を行っていく。また、より具体的な理解を深めるために、事例検討や映像教材も取り入れていく。15回の授業を行い、評価については期末試験及びノート提出によって評価を行う。</p>	
	社会的養護 I	<p>授業目標：この科目は保育士養成カリキュラムにおける告示科目であり、「保育の本質・目的に関する科目」の系列に位置づけられる保育士必修科目である。この科目の到達目標については以下のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 現代社会における社会的養護の意義と歴史の変遷について理解する。 2. 子どもの人権擁護を踏まえた社会的養護の基本について理解する。 3. 社会的養護の制度や実施体系等について理解する。 4. 社会的養護の対象や形態、関係する専門職等について理解する。 5. 社会的養護の現状と課題について理解する。 <p>授業計画：到達目標を達成するため、配布資料を中心として講義を行っていく。また、より具体的な理解を深めるために、映像教材を取り入れていく。15回の授業を行い、評価については期末試験及びノート提出によって評価を行う。</p>	

社会的養護Ⅱ	<p>授業目標：この科目は保育士養成カリキュラムにおける告示科目であり、「保育の内容・方法に関する科目」の系列に位置づけられる保育士必修科目である。この科目の到達目標については以下のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 子どもの理解を踏まえた社会的養護の基礎的な内容について具体的に理解する。 2. 施設養護及び家庭養護の実際について理解する。 3. 社会的養護における計画・記録・自己評価の実際について理解する。 4. 社会的養護に関わる相談援助の方法・技術について理解する。 5. 社会的養護における子ども虐待の防止と家庭支援について理解する。 <p>授業計画：授業は、主にグループワークなどを活用した演習を中心に進めていく。15回の演習を行い、評価についてはノート提出によって評価を行う。</p>	
保育マネジメント論	<p>保育現場の運営では、保育の計画に関連して安全計画を作成して一体的に運営することが求められる。安全計画では危機管理の基本的な考えを踏まえて、安全管理と安全教育を効果的に進めることになる。このことを踏まえて火災、地震、水害など災害や日常的な保育活動での安全管理と安全教育について取り扱う。さらに、食の安全や感染症対策なども保育現場での安全管理として重要であることから、事例を通して対応について学ぶことで保育現場の危機管理について理解する。また、普段から保護者や地域とのコミュニケーションを円滑にしておくことも含めて苦情への対応や、広義には安全管理に含まれる体罰やパワハラ・セクハラなどの不祥事防止についても取扱うことで危機管理意識を高めるようにする。</p>	
保育における連携・接続	<p>本授業では、幼児教育の立場から見た連携のあり方について学ぶ。保育者をめざす学生らに対し、保育及び幼児教育との連携がいかなるものかについての認識し、さらには小学校との連携について連携の現状及び課題について認識するものである。なかでも保育及び幼児教育との連携、小学校との連携、子どもの生活に即した活動や体験を通じて幼保小連携の現状と課題を見出し、連携の必要性や具体的な方法を学びながら、よりよい連携のあり方を探り、考えるものである。</p>	
保育ソーシャルワーク実践演習	<p>授業目標：この科目は、様々な場面において、ソーシャルワークを実践する保育者としての基礎的な力の形成と、今までの学習で培った、知識・技術を活用した、保育ソーシャルワーク実践について理解することを目標としている。この科目の到達目標については以下の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 保育ソーシャルワーク実践者として、自己覚知を深めるとともに、多様な支援の対象者について理解をする。 2. 保育ソーシャルワーク実践者として高い倫理性を備える必要性を理解する。 3. 保育ソーシャルワークにおける支援を計画・実践し、評価・改善を図る力を備える必要性を理解する。 4. チームワーク及び、地域・多職種連携の在り方を理解し、実践できる力を備える必要性を理解する。 <p>授業計画：授業はグループワーク等の演習を中心に進めていく。15回の演習を行い、評価については、ノート及び課題の提出によって評価を行う。</p>	

特別な支援を必要とする子どもの理解と援助	特別支援教育概論（障害児保育を含む）	幼児期の特別支援教育および障害児保育に関する基礎的知識教養を身に付けるための授業である。特別支援教育概論、障害児保育それぞれに必要な内容をほぼすべて網羅し、今後各分野を専門的に学ぶための基盤形成を行う。前半で主に幼児期の特別支援教育を、後半で主に障害児保育を取り扱うが、両者には重なる部分が多く30回の授業を通して総合的に学びを深める。	共同
	療育論	まず、保育現場において支援のニーズのある子ども、例えば発達障害やその疑いがある子ども、障害のある子どもの行動特性の理解を深める。事例を通じて子どもが困り感を抱きやすい場面について具体的に理解し、実際的な対応の仕方について知る。また、子どもを支えるチームとして、保育者間のチームワークの構築について理解する。さらに、保護者支援の実際について理解し、専門機関についての情報共有や地域連携の在り方について理解する。授業においては、適宜グループディスカッションやロールプレイを行い、柔軟に他者の視点を取り入れながら子どもの利益を優先して対応する力を養う。	共同
	療育論演習	まず、保育現場において支援のニーズのある子ども、例えば発達障害やその疑いがある子どもについて、事例を通じて子どもが困り感を抱きやすい場面について具体的に理解し、実際的な対応の仕方について知る。子ども理解の手法として、知能検査や発達検査、また行動観察について理解を深める。加えて、実際の保育現場で行っている環境調整の工夫や支援グッズについて実際を知り、保育現場における子どもの支援スキルを養う。さらに、保護者支援の実際について理解し、専門機関についての情報共有や地域連携の在り方について理解する。	共同
	障害児教育総論	この授業では、障害の概念について理解を図るとともに、知的な遅れのない発達障害も含めて特別な支援を必要とする幼児児童生徒の発達・障害特性について概説する。また、特別支援教育の理念と障害者の権利に関する条約に関わるインクルーシブ教育システムの構築等も含めて、障害のある幼児児童生徒の教育の歴史を概説する。これらを基に、特別支援学校など教育の制度とそこでの教育の概要、幼小中高等学校で求められる教育的支援やそのための体制整備、生涯にわたる関係機関との連携について概説する。	

	<p>知的障害児の心理・生理・病理</p>	<p>知的障害やその周辺領域の障害を対象とし、それらの障害に関する心理についての基礎的な知識を得る。基礎的な知識とは、知的障害の概念や定義に加え、知的障害の指標となる知的・発達検査について、またワーキングメモリの容量の少なさや選択的注意の苦手さの認知的特性等について理解することである。加えて心理的特性を踏まえた言語概念の獲得の指導や行動理論について理解を深め、知的障害児への教育的なかかわりについて理解を深める。また、自閉スペクトラム症やダウン症・てんかん、ADHD等知的障害と合併することがある障害についても理解する。これらのことを踏まえて知的障害の教育（事例検討、心の理論課題、感覚情報処理の特異性、自立活動の指導法等）について理解する。知的障害を中心に発達期の障害を対象とし、それらの障害に関する生理、病理についての基礎的な知識を得る。知的障害者の病理的要因及び生理的要因（例：脳機能の特性、ダウン症やてんかんなどの合併症、行動障害・強迫性障害等合併しやすい精神疾患等）について触れる。これらのことを踏まえて知的障害や知的障害を伴う自閉スペクトラム症の教育（事例検討、心の理論課題、感覚情報処理の特異性、自立活動の指導法等）について理解する。</p> <p>（オムニバス方式/全15回） （29 本吉菜つみ/7回）</p> <p>知的障害児の心理として、知的障害の認知的特徴の理解をもとに、発達・知能検査等や行動理論について解説する。さらに、そこから分かる知的障害児の特徴を踏まえた具体的な対応について解説する。</p> <p>（30 百崎謙/8回）</p> <p>知的障害児の生理・病理として、知的障害の診断について知るとともに、知的障害及び類似の神経発達障害が発生する要因を解説する。さらに、幼少期を中心に知的障害に関連する障害の原因や発達の特徴について解説する。</p>	<p>オムニバス方式</p>
	<p>肢体不自由児の心理・生理・病理</p>	<p>肢体不自由児者の病態について、脳性麻痺や筋ジストロフィー、二分脊椎などについて触れ、脳性麻痺をもたらす脳の損傷についてや運動障害の状態について理解する。また、骨や筋肉の発達に加え関節の動きの理解を行う。加えて視知覚等の認知的特徴や、性格やストレス耐性などの情緒的特徴について理解する。そして、脳性麻痺を有する児童生徒の心理特性について理解を深め、肢体不自由に関する心理・生理・病理に関する基礎的な知識を踏まえた教育的対応について、自立活動の観点から理解する。</p> <p>（オムニバス方式/全15回） （29 本吉菜つみ/7回）</p> <p>肢体不自由児の心理として、定義や生活の困難、運動発達と身体の動き、視知覚認知の特性、日常生活動作などについて取り扱う。</p> <p>（31 松岡輝樹/8回）</p> <p>肢体不自由児の生理・病理として、脳の働きや骨と筋の発達を踏まえつつ、脳性麻痺等の病理分類と随伴する障害、口腔機能、医療的な配慮及び医療的ケアについて取り扱う。</p>	<p>オムニバス方式</p>

病弱児の心理・生理・病理	病弱教育で扱われる小児疾患のうち、白血病や心疾患、腎臓疾患などの身体疾患と、摂食障害、うつ病、統合失調症などの精神疾患を取りあげ、脳の機能局在と可塑性を含む各臓器の生理と病理に関する基礎知識をはじめ、治療と予後についても解説する。また、病弱児や病気療養児の発達段階を踏まえながら、治療や行動制限に対するストレス、化学療法による脱毛や晩期合併症に対する不安等の心理を理解し、特に長期入院の病弱児への心理的対応や配慮事項、自己肯定感や自己効力感を高めるための心理的支援についても触れる。さらに、選択性緘黙などの情緒障害についても解説を加え、病棟保育士の対応や保護者への支援についても取りあげる。	
知的障害児教育論	<p>知的障害児の心理・生理・病理の理解を基盤とし、知的障害のある幼児の知的障害の状態や特性等を踏まえ、幼児がゆとりや見通しを持って主体的に活動できる環境を計画的に構成する指導計画の作成及び実践上のポイントを取り上げる。また、知的障害のある幼児の「困難さ」に対する「指導上の工夫の意図」を整理した上で、個に応じた様々な「手立て」を工夫することについて、ことばや数の基礎、社会性の発達、身辺処理、運動などを取り上げる。その際、支援機器としてのICT機器の活用にも触れる。</p> <p>自立活動について「具体的な指導内容」を設定する過程を学ぶことになるが、特に幼児の生活上の困難とともに長所や得意なことも含めて必要な情報の収集・整理し、中心となる課題の抽出と具体的指導内容の工夫について理解を深める。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (7 吉田道広/8回)</p> <p>知的障害児の教育の歴史から学び、教育課程について理解する。知的障害児の特性を踏まえて、ICT機器等を活用した指導計画について理解する。</p> <p>(④ 尾関美和/7回)</p> <p>知的障害児のコミュニケーション等について学ぶ。生活するうえで必要なコミュニケーションや心身の健康の保持について学び、自立活動の指導について理解する。</p>	オムニバス方式
肢体不自由児教育論	<p>肢体不自由児教育の歴史的背景や取り巻く環境について学ぶ。</p> <p>また、発達の段階、肢体不自由の状態等から教育的ニーズを把握する。その上で、肢体不自由のある幼児が意欲を持って環境と関わるができる環境構成を「運動」や「コミュニケーション」「概念の形成」などにも着目して考えることにする。</p> <p>自立活動について「具体的な指導内容」を設定する過程を学ぶことになるが、特に幼児の生活上の困難とともに長所や得意なことも含めて必要な情報の収集・整理し、中心となる課題の抽出と具体的指導内容の工夫について理解を深める。</p> <p>こうした授業を通じて、肢体不自由のある幼児が生活上の困難を主体的に改善・克服しながら、幼児期にふさわしい生活の中で様々な体験を積み重ねることができる実践的指導力の基本を身に付ける。</p>	

	<p>病弱児教育論</p>	<p>「病弱児の心理・生理・病理」の理解を基盤とし、幼稚園教育要領解説「障害種別に留意する事項」及び、小学部学習指導要領解説に示される指導計画の作成と内容の取扱いに関する配慮事項を踏まえ、特別支援学校における教育課程と指導のありようについて解説する。自立活動については、例えば白血病などで入院している児童生徒に対して「心理的な安定」や「コミュニケーション」に示される項目を重点としながら、それらを相互に関連づけて具体的な指導内容を設定するなど、個々の実態に応じた自立活動の「具体的な指導内容を設定する過程」等を通して実践的指導力の基本を身に付ける。また、いわゆる院内学級における教具・教材、病棟での感染予防策とアレルギー疾患への配慮、ベッドサイドでの指導方法、ICTの活用について解説し、医師や看護師、病棟保育士など医療関係者との連携についても触れる。</p>	
	<p>特別支援教育コーディネーター論</p>	<p>障害のある子どもと他の子供が日々の生活や遊びを通して共に育ち合う経験は、互いに人格と個性を尊重し合う共生社会を創造する基盤となる。そこで、インクルーシブ教育システムの考え方に基づき、知的障害、肢体不自由、病弱の子どもが可能な限り共に学ぶための基礎的環境整備と合理的配慮（保育教材等での特別な支援を含む）について理解する。さらに、保育の場において個別の指導計画や個別の教育支援計画を活用した園内の支援体制、家庭や関係機関との連携、発達の気になる子どもも含めて保護者からの相談窓口の役割を果たすことなど特別支援教育コーディネーターの役割について学ぶ。さらに、障害のある子どもの就学の手続きとそのための支援について具体的理解を深める。</p>	

知的障害児の言語指導	この授業では、幼児の発声発語におけるニーズに着目し、知的障害児を中心としながら、言語障害児も含めて言語指導の方法について実践的に学ぶことを目的としている。前半では発声発語のしくみ、また構音のしくみについて概説することでその理解を図る。後半では知的障害児の発声発語におけるニーズ、さらに構音障害、口蓋裂、吃音など言語障害のさまざまな種類とその実態について理解を深める。さらに幼児に対する支援の実際として、「お口の体操」や、「音別の指導」について学ぶ。このように本授業では、幼児の言語発達と発声発語の機序を理解した上で、特別支援教育のさまざまな場であう子どもの言語障害を理解し、それに対する指導方法を理解する。	
障害児教育課程論	この授業では、法令及び特別支援学校幼稚部教育要領、小中学部学習指導要領を基に、学校教育目標を具現化する「社会に開かれた教育課程」の編成の意義と基準、手順について理解を図る。その際、障害の状態や特性及び発達の程度等に配慮しつつ幼児にふさわしい生活を展開すること及び、「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」に向けて在籍期間を見通した指導計画を作成すること、効果的な指導を行うため、一人一人の幼児の実態を的確に把握した個別の指導計画を作成するとともに、個別の指導計画に基づいて行われた活動の状況や結果を適切に評価して指導の改善に努めることなどについて理解を深めるようにする。	
重複/発達障害児教育総論	LD、ADHD、自閉スペクトラム症候群などの発達障害の心理・生理・病理面をDSM-Vなどを参考に理解する。さらに、重度重複障害児や視覚障害と聴覚障害をあわせ有する子ども、行動上の重複障害として知的障害を伴う自閉的傾向児など知的障害とともに発達の偏りや行動のアンバランスがある子どもへの支援について取り扱う。その中で、ICT機器を含めた教材の活用、環境構成を工夫した指導計画案及び、自立活動の具体的な指導内容について理解し、指導に役立つスキルを培う。	
視覚障害児教育総論	この授業では、幼稚園の教育や職業教育など盲学校（視覚障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校）での特色ある教育を含めた視覚障害教育の現状及びその歴史について理解を図る。さらに、視機能と眼疾患についての理解を深め、視覚障害（盲及び弱視）を補って幼児が聴覚、触覚及び保有する視覚などを十分に活用して周囲の状況を十分に把握できるための環境構成と様々な教材教具、補助具について詳述する。特に言葉と概念形成に関する指導については自立活動の具体的な指導内容の設定手順を踏まえて個別の指導計画の作成を行うことで具体的な理解を深める。	

聴覚障害児教育総論	<p>聴覚障害児教育の歴史（戦後のろう教育、新しい聴覚障害教育の方法等）、制度、そして特別支援学校（教育課程及び指導法）等に関する基本的な知識及び技能の修得と理解を深める。聴覚障害児の心理、生理、病理の理解を基盤とし、教育課程の役割、教育課程の編成及び教育課程の実施と評価を確認し、聴覚障害教育の指導計画を作成する際、特に配慮する事項（学習の基盤となる言語概念の形式と思考の育成、読書に親しみ、書いて表現する態度の育成、言葉による意思の相互伝達、保育する聴覚の活用及び指導内容の精選等）について詳述し、特に言語に関する指導については自立活動の指導内容を設定するまでの例（①の収集した情報を自立活動の区分に即して整理する段階から④整理した情報から課題を抽出する段階）を基に理解を深める。更に、聴覚障害教育の目標と指導形態についても理解する。</p>	
特別支援学校教育実習	<p>特別支援学校教育実習では、特別支援学校の教育現場での観察、参加、教育の実施を体験することによって、これまでの学修した理論や知識、技能を確認し、教育者としての愛情と使命感を深め、特別支援学校教諭としての基礎的技術を身に付けることを目的としている。その目的の達成のために、幼児児童との関わりを通して一人一人への理解を深めるとともに、教育課程及び指導計画を踏まえて学校の教育について総合的に学び、授業の計画及び教材の工夫をおこない授業を実施する。また、教育に参加する中で安全・安心に配慮した学習環境、一日の流れと教師の役割、教員間のチームワーク等を学ぶ。このようにして学んだことを振り返り、理解を深めるために実習記録を残す。</p>	共同
特別支援学校教育実習指導	<p>特別支援学校教育実習に際しての事前指導と事後指導とに分かれる。事前指導においては、特別支援学校教育実習の意義や目的、実習の内容等との関連性を踏まえて具体的なねらいや内容の設定、環境の構成、活動の展開と教師の援助等の指導計画及び、指導案の作成を通して授業実践を構想すること、教育の観察、記録及び実践事例等を通じた授業改善つなげること、それらを総合して教育者として愛情と使命感について学ぶ。一方、後者の事後指導においては、授業実践記録に基づき指導案や教材について分析を加え、教育実習中の具体的な問題点・疑問点・成果等について明確にすることで教育者、保育者としての基本的資質を高める。</p>	共同

補足資料（学校法人尚綱学園 設置認可等に関わる組織の移行表）

令和4年度

	入学 定員	編入学 定員	収容 定員
尚綱大学			
現代文化学部			
文化コミュニケーション学科	75		300
生活科学部			
栄養科学科	70	3年次 10	300
<hr/>			
計	145		600
尚綱大学短期大学部			
総合生活学科	80	—	160
食物栄養学科	80	—	160
幼児教育学科	150	—	300
<hr/>			
計	310		620

令和5年度

	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
尚綱大学				
現代文化学部				
文化コミュニケーション学科	75		300	
生活科学部				
栄養科学科	70	3年次 10	300	
こども教育学部				
こども教育学科	<u>70</u>	3年次 <u>5</u>	<u>290</u>	学部の設置(認可申請)
<hr/>				
計	215		890	
尚綱大学短期大学部				
総合生活学科	80	—	160	
食物栄養学科	80	—	160	
幼児教育学科	<u>100</u>	—	<u>200</u>	定員変更(△50)
<hr/>				
計	260		520	